Kobe Shoin Women's University Repository

Title	太平洋戦争と英文学者 (3) Teachers of English in Japan during World War II (3)
Author(s)	宮崎 芳三(Yoshizo Miyazaki)
Citation	Shoin Literary Review, No.27 : 139-156
Issue Date	1994
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

太平洋戦争と英文学者(3)

宮　崎　芳　三

7　『英文学の話』

(1)　天皇

『英文学の話』には、日本の天皇が出てくる。それもなんども出てくる。さいしょに出てくるのは崇神天皇である。彼は第１章第１ページの最初に出てくる。「西暦紀元前55年頃、わが崇神天皇が四道を平定して海外征服の雄図を懐き給うた頃のことであった」(p. 1、以下数字のみあげる）というぐあいである。(――ついでだが、ここからもうこの本はおかしい。というのは本文直前の「序」でイギリスアメリカのアジア侵略を非難したばかりというのに、それが日本の天皇となると、とたんに「征服の雄図を懐き給うた」と言ったりするのがおかしいのである。まあそれはさておき――)つづいて允恭天皇が出てくる。「これが今の英国の建国である。時に西暦紀元449年頃（中略）わが第十九代允恭天皇の御宇であった」（４）とある。その他つづけて、聖武天皇 (10)、後冷泉天皇 (14)、(これは天皇ではないが）鳥羽上皇（17）などが登場してくる。

そこで質問の第１――英文学の本なのになぜ日本の天皇が出てくるのか。大和はなぜそんな書き方をしたのだろう。彼のねらいはなんだったのだろう。おそらく私の推測では、英文学の議論のなかに天皇をもち出してまずショックを与え、読者に日本人であることに目ざめさせるというねらいがあったのだ、と思う。そのねらいから言えば、開巻早早の崇神天皇の

登場は十分にきいている。しかしつぎつぎに天皇が登場するにつれ、自然ショックはうすらぎ、むしろ逆に機械的なおさだまりの登場という感じになる。彼らはただ、イギリスの歴史と日本の歴史とをつき合わせて、イギリスでナニナニの時代は日本ではコレコレの時代にあたる、と言うときの便利な目印として使われている、という感じになってしまう。「エリザベス朝はわが正親町天皇の御即位にはじまり（中略）後陽成天皇の慶長8年、家康が征夷大将軍に任ぜられた年まで、45年間にわたる」(46)といった調子である。――ところでついでに言っておくと、この日英両国年表対照の目印は、主に天皇だがその他にもいろいろある。たとえば幕府将軍。ジョージ二世在位期間は、「八代吉宗より十代家治宣下まで」(143、脚注)といったぐあい。また社会的大事件も使われる。1例は、「桜田門外の変があった万延元年」(315) という箇所。その中には、イングランドとスコットランド合併は「富士山噴火の年」(142) という妙なものもある。

それはともかく、さきの質問の第1、なぜわざわざ天皇が出てくるのか、に対して、本全体を読んだ上で、ごくあっさりと、年表対照の目印として、と答えることができる。それは、天皇の登場のし方にきまった型があり、その型から推しはかるとそういう答になるのである。

そこからすぐ質問の第2が出てくる。本文を読み進むと（この本は歴史的順序に従って書いてある）17世紀になると天皇のすがたがしだいにかすんでくる。まず本文から脚注へずり落ちる。チャールズ二世の在位期間を書いたところに注の印がつき、ページ下に脚注として小活字で「わが後西天皇より霊元天皇の御宇（後略）」(138) となっている。つづいてジョージ二世在位期間の注として、ページ下段に「わが中御門天皇、享保12年より桃園天皇宝暦10年に至る（後略）」(143) と書いてある。そしてそのあとでもういちどだけ本文にチラと出る。「ジョオジ一世の代、わが中御門天皇の享保4年」(162) というところである。これが本当のさいごで、それからは本文、注のすべてから天皇は消える。読んでいると、まるでなにか一定の手順をふんで行われる宮中儀式を見ているような感じになる。まず冒頭ものものしく登場してみなをアッと言わせる。しばらくしてやおら控えの

間の脚注にひっこみ、そしてそこからもついに音もなく姿を消すのである。しかしそれにしては少々退場するのが早過ぎはしないか。彼らの内一番おそく死亡するのは桃園天皇で、その死亡年は1762年、まだまだこれから日英両国とも波乱万丈の歴史が展開するというのに、と私は思うのである。そしてこれはなぜだろう、というのが私の第2の質問である。

あっさりと、それは大和が飽きたからだろう、と答えたい。いちいちナニ天皇の御宇というのがめんどうになったからだろう。だって、年表対照という機械的作業は、誰でも少しやっていれば飽きてしまうのである。きっと彼はあきあきしたんだろう、と私は理解しながらも、それでもやはり、そのことにおどろくのである。年表対照の目印としてであれ、ためらいもなく天皇の名を口にし、くり返して名をよぶうちに飽きてきてしまいにプツンと口にしなくなる。その気がるにとりあげ、飽きるともっと気がるにそれを捨てるというこの手がるさ、こういう著者大和の態度は、いまふり返って私の少年時代の態度と真向から対立するものである。天皇の名は、私には気がるには口に出せないものであった。新聞ラジオは、私に天皇は現人神であると教え、しかもその教え方が圧迫的過ぎて、私は、天皇の名を口に出すような機会はとにかく避ける以外になかった。

そこでこういうことが想定できるのではなかろうか。もし当時戦争中、あらゆる機会をとらえて天皇への敬神的傾倒を示す極右思想家が、仮りにこの『英文学の話』を読んだ、と想定するのである。そのときその男が、大和の、天皇に対するお手がるな取り扱いぶりを取りあげて、彼のこのようなやり方はただの年表対照の便宜のためのものに過ぎない、ととがめたとしよう。それは天皇尊重でなくむしろ天皇軽視の現われであってなんたる不忠不敬、と非難したとしよう。私の想像では、大和は、その弁護のために、大汗をかかねばならなかっただろう。この本の「序」の末尾に、「皇国の名を負える／大和資雄」と署名した彼としては、その非難はどうしても受け入れるわけにはいかなかっただろうから。

むろん私の想定する極右天皇主義者の非難は、ためにする言いがかりである。大和はあたり前のことだが、不忠不敬ではなかった。かといって、

「序」が言うほどの忠良な臣民でもなかった、というのが私の推測である。場ちがいな英文学の議論に天皇の名をもち出すほどには、彼は日本人の立場に立つ人であった。しかしその天皇の取り扱い方から見ると、彼の天皇に寄せる思いが、さほど深いものだったとも思えない。

思いが浅い深いはもとより相対的なもの、他のナニかとくらべてのもの言いである。ナニとくらべてそれを浅いと私は言うのか。大和のイギリス王室に対して寄せる深い思いにくらべれば、彼の日本天皇への思いは浅いのである。

まさか、と人は言うかもしれない。その「序」の始めにことさら大きい活字で、「屠れ米英われらの敵だ！」と印刷してあるこの本の、そういう「序」につづく中味において、大和がイギリス王室に寄せる深い敬愛の思いを表わしているなどとは信じがたいことだと人は言うかもしれない。あたり前のことだが大和が本文の中で、「私はイギリス王室が好きだ」などと書いているわけではない。そんなことあからさまに書けるわけがないのである。ただ私は、大和の本文の口調、ちょっとした言いまわしの特徴から、それを察するのである——恋に落ちた女性の、ほんの少しのしぐさ、身ぶりのかすかな特徴から、その恋情がはっきりと察しられるように、である。以下、本文から受けた私の印象をもとに説明をしてみたいが、そのさい、そのような直接証拠のない、いわば状況証拠ばかりの推測など信用できない、と言われないように用心したい。

まず第1に、大和はイギリスの王には敬語を使う。というより、もともとイギリス王室に親身な気持をもっていて、そこから自然に敬語的な言いまわしが出てくる、と言った方がいい。例はいくつもある。たとえばジョージ三世の死について、「81年の気の毒な生涯を終えられた」(192)と書いてあるのだが、その「気の毒な」という形容が私に伝える印象が1例である。またべつな例としては、「1837年6月20日不人気であったウィリアム四世がなくなられて、芳紀18才の姪ヴィクトリア女王が即位した」(256)の「芳紀18才」という言い方が私に伝えるもの。または「1861年12月14日皇婿アルバアト公がなくなられて、女王は30年の寂しい後半生を送られねばな

らなかった」(316) という文章が伝える (――私だけだろうか、そう感じるのは)「30年も！なんというおさびしいお暮らし！」という親身な心持ち、が第3の例。もうひとつ、これはれいのエドワード八世とシンプソン夫人の恋愛事件をのべた箇所である。この事件は、きっと極右天皇心酔論者だったら、イギリス王室のふしだらさを言いつのるこれ以上ない好都合の事件だったろう。それを大和はこう書く――「快活な皇太子がエドワド八世となったが、即位式の前に米国のシンプソン夫人との恋愛事件で12月12日退位され、皇弟ヨオク公が位をついでジョオジ六世となられ、先王はウィンザア公となって恋人と結婚した」(357) と。この文章は、書き手の大和が、あの事件をスキャンダル扱いしていないことを明瞭に示している。それどころか、まずさいしょの「快活な」という形容が、もうハナから彼とシンプソン夫人との恋愛を自然のものと受けとめようとする気配を示している。そして「退位され」という敬語は、もしこの事件を糾弾している者なら使えない言葉だし、またさいごの「恋人と結婚した」という言い方は、あっさりと事実だけを書いて、書き手の悪意偏見はそのどちらもかけらほども感じさせない。

大和はイギリス王室が好きなのだ、としか言いようがない。それはもう隠しようがないほど、ちょっとした言葉の使い方、言いまわしにもすぐ出てしまうほどだ。その「好き」という感じは、深く一貫していて、そのことは、彼が日本天皇に対してもっている感じが浅く尻切れとんぼで一貫していないのと、はっきりと対照的である。

――大和さん、そうではありませんか。

と仮りに私が直接彼にそうきいてみた、と仮定しよう。本文のこの箇所あの箇所と具体的にあげて、そう彼にきいたとする。きっと彼は少しあわてて

――まあ待ちなさい、キミ。

となんとなくあたりを見まわし、声を低くして言っただろう、と私は想像するのである。

――それはだね、ソコはなんというか、そのまるでもうそうなるとそれ

はボクの地のようなもんだナ。

——地？

と私はきき返す。

——そうだ、地だ。これはボクの地であって、自分でもどうにもならないものなんだな、コレは。

たしかにこれは地のようなものなのだろうなあ、といまこの本を読んで私は思う。べつなたとえでいえば素顔だ、と言ってもいい。地と言い素顔と言い、もともとのその人のたちのようなものを言いたくて私はそのたとえを使うのである。その人の一生を通してついに変らない考え方生き方の特徴のことである。それにくらべれば、人がそのつど身につける思想上の立場はけっきょくさまざまな意匠に過ぎない、という極端なことまでは私は言わない。しかし、もしも議論が彼の地、素顔、あるいは性根、たちにまでとどかなければ、彼の意匠をいかにせんさくしてもむなしいだろう。

大和の地とはなにか。それが明らかにできなければ、私の議論は大和の心にとどくまい。かといって、かるがるしく、地だ素顔だと称してあれこれあげつらうのは、けっしておかしてはならない非礼というものだろう。だからもし私が大和の地、素顔を明らかにしたいのなら、私はあるかぎりの慎重さをつくしてもまだ足りないだろう。まずゆっくりと、あらためてこの本の内容についての説明から始めたい。

(2) 「日本的立場」

この本にはいったいなにが書かれているのか。そしてその内容が本当に「前人未踏」の「日本的立場」からの議論となっているのだろうか。

まずその内容は、英文学の始まりからずーっと20世紀までの歴史を書いたものである。べつに現在から逆に昔にさかのぼるという思いきった形のものでもない。また3つ4つの時期だけをくわしく書いてあとは無視したという大胆なものでもない。その点ではごくふつうの形の文学史である。形式ばかりでなくその中味も、ことさら奇抜な意見をもち出そうとしたものではない。たとえばシェイクスピアのところを見ると——まず始めに略

伝がある。そのあと作品の紹介がつづく。全体を4期に分け、第1期『ヘンリー六世』から順にさいごの『あらし』まで36篇の作品とソネット詩集があげてある。それぞれの作品は、出版年、あらすじ、注目すべき点などがしるしてあって、全体としては難のないシェイクスピア紹介となっている。この短いスペースにこれだけ要領よくまとめるのはよほどの知識と鑑賞眼がなくてはできないことで、私は、さすが、と感心するのである。その他たとえばディケンズのところを見ても同じである。ここでも全部で17篇の作品があげられていて、全体を要領よくまとめあげていく手ぎわはなかなかのものだ、と私はやはり感心する。だからさっき私は、この本の形式をごくふつうの書かれ方をしていると言ったが、その中味も、同様にきわめて穏当なものだと——そういう穏当な文学史を書くことが凡才の人間にはいかにむずかしいか、を強調した上で——私としては言いたい。ただ通読すると記述にいくつかの特徴があって、その点でこれは文学史として少し変ったところがある。その特徴というのはつぎの6点。(小さい特徴まであげればもっとあるが。)

1．各時代の時代背景を説明したあと主な作家作品があげられているのだが、その数がやたら多い。それも文学者ばかりでなく哲学歴史自然科学方面の名まであげてあるから、もうハチ切れんばかりの超満員である。

2．アメリカ文学史も含む。「第19世紀までのアメリカ文学を英文学に包含させ」たのは「英語・英文学から米語・米文学が分かれたのは最近のこと」(「凡例」2）だからだ、と著者は言う。

3．(前に言ったが)年表をつき合わせて、イギリスのこの時は日本のいつにあたる、と書いてある。とくに天皇名をあげた箇所が多い。

4．作品から引用して、過去の日本人がつけた訳をあげている。たとえばシェイクスピアでは逍遙訳（101、102、107、108）をはじめ鷗外訳（104）土居光知訳（92）といったぐあい。その内現在の私に珍しいものでは、明治27年塩井雨江のスコット訳（211)、片上天絃のテニスン訳（276）がある。

5．訳ばかりでなく、日本人学者の書いた評伝、研究書が数多くあげられていて、それらの文献を見ていけば、戦争前日本人の研究がどこまですすんでいたかをしらべる糸口が得られるのである。

6．日英比較文学（というほどのものでもないが）的言及がある。

以上6つの特徴をあげたが、そのどれをとってみても、この本が著者が「前人未踏」と言うほどの画期的なものであるとも思えない。著者は「日本的立場」に立ってこの本を書いた、と言うが、たとえばその立場は、上記の第6の特徴に現われているのだろうか。その比較文学的言及はこの本の中に3つある。(1)10世紀のイギリスは「軍歌が残るばかりで、わが平安朝の古今集や土佐日記や枕草紙や源氏物語などの続々と出た同じ時代と比べて、わが国の文学の発達がいかに早かったかを痛感せざるを得ない」(14)という箇所。(2)「ソネットというのは（中略）漢詩の絶句のように起承転結の四部の構想を含み、短く整っている点で我が和歌の短歌とも似かよった詩形である」(54)という箇所。(3)シェイクスピア『ヘンリー五世』の“Now sits the wind fair, and we will aboard.”（II．ii．12.）について、これは「翻訳しては全くぶち壊しであり、ただわが万葉集の「にぎ田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎ出でな」(額田王)という高らかな大らかなしらべとだけ相通ずるであろう」(97) という箇所。

しかしこのたった3つの箇所だけで、これこそ「前人未踏」である、「日本的立場」であるとはとても言えない。ましてその他の、年表をつき合わせたり、または日本人の研究書や翻訳をあげた箇所が「日本的立場」を表わしていると言えはしない。それらは、せいぜい「日本的立場」からの議論のための材料となるもので、それを手がかりに、そこからその種の議論を始めようと思えば始められる、というものに過ぎない。「序」や「凡例」から私が期待するようなものは、この本の中にはないのである。ではそれならいったい私は、なにを期待したのだろう。

大和は失敗した、「序」「凡例」の主張を実現できなかった、と私はいま書いたが、では私ならどう書いただろう。イギリスの文学について、「日本的立場」から書くとしたら、私だったらなにを書きたいと望むだろう。（ひ

とはそこまで自問しないでもよかろうに、と言ってくれるだろうか。たとえば詩を批評するのは、詩をつくれない人にも可能である。しかし学問研究の批評は、批評する人も専門の研究者でなければなるまい。としたら、私は大和と同業のひとりとして、自分だったらどう書くか、と自問しないわけにはいかないのである。)

もしも大和が、「日本的立場」という旗をかかげ、その旗の下にシャニムニつき進み、その突進のあげくに失敗したのなら、私の評価もずい分違っただろう、と思う。シャニムニと私が言うのは、たとえばイギリスの文学作品を読んで私が違和感を感じるとき、その小さな個人的な違和感を手がかりに、その感じがどこから出てきたのかを考え、その考えをのばせるだけのばしてみる、というやり方のことである。

シェイクスピアを例にとってみる。そして、なぜ私は彼の芝居をウソっぽく感じるのか、と考えてみる。シェイクスピア——ばかりではない、西洋の芝居全体がそうだ——がウソだと言うのは、あんなに自我のつよい人間なんて、この日本という国のどこにもいないからである。西洋のドラマは人の性格から引き起こされる。主人公が強烈な自我を貫き通そうとし、戦って破れる。それが悲劇だ。だから「ドラマチック」というのは、はげしい自我のぶつかり合いが生み出す緊張した状況のことだ。そして私たちは、そういう芝居を見ながら、彼らの断固たる行動やかみつくような議論——じっさい西洋の芝居は議論の連続である——を前にして、もうあっけにとられるのである。よくやるよ、としか言いようがないのである。その猛烈な自己主張は、しかし私たちにはない。私たちの暮らしを、そのすみずみまでどうひっくりかえしてみても、そんなものはない。たまに個性的な人——というよりクセのある人——がいても、たいていもてあまされしまいに変人扱いされてしまうのを見ていると、直輸入翻訳劇的人物像にはとてもなじめないのである。

そしてもしも、そういう私の違和感を自覚した上で、あくまでその感じにこだわりながら考えをのばしていくならば、話は広がっていって文学の比較ばかりでなく、文化や社会の仕組みの比較にまで話は大きくなってい

くだろう。そうなると、かんじんの文学は、隅の方で小さく扱われてしまう、ということになるかもしれない。さきに私が言った大和の失敗が、そういう失敗――「英文学の話」をするという目的からいえば、明らかな失敗――であったならば、たぶん私のような後進の研究者に対して刺戟するところのあるものとなっただろう。私はむしろその彼の失敗に対して敬意を払い、その彼のつき進んだ線をなんとかして受けつぐ者として彼のあとを追いたいと願ったことだろう。

『英文学の話』には、シャニムニつき進んでいくすがたはない。「序」や「凡例」にかかげられた「日本的立場」という旗が、悪戦苦闘の戦いの中にボロボロになりながらもなお屈せずひるがえっている、という光景は、そこにはない。

ではこの本には、けっきょく年表のつき合わせや比較文学的思いつきがあるだけで、「日本的立場」というかけ声にひびき合うように答えた箇所はないのかというと、それは、ある。1カ所だがそれは本のさいごの「第20世紀の英文学」の章に突然出現して強い光をあげて私の目を射るのである。こう書いてある――「英国は印度やアフリカや其他の植民地を血まみれの赤い手で掠めとり、米国もハワイ王国を惨酷にも亡し取ったことを忘れ、遠い満洲までリットン報告などを作りによこし、わが国を侵略国呼ばわりするような傲慢な振舞をするので、神の鞭をうけるのも不当とは言えまい。(中略)〔日本が〕東洋人として東洋の失地を欧米人から回復することは、正義の神が命じ給うところである」(358)と。読むとまるでこの1節だけが赤いインクで印刷してあるかのように、つよくあざやかに印象づけられるのである。大和はなぜこれを書いたのだろう。これは彼の「日本的立場」の一瞬の爆発なのか。ここにいうリットン報告とはなにかといえば、イギリスのリットン卿を中心とした代表団が中国の実地調査にもとづいてつくった報告書で、昭和8年の日本の国際連盟脱退の原因となったものである。大和は前にもリットン報告のことにふれている。19世紀の作家ブルワ・リットンについて、「その子孫は満洲事変のリットン報告で有名である」(239)と言っている箇所である。ここで大和が、「あの日本人として許しがたいリ

ットン報告で」とでも書いてくれていたら、さっき引用したあの１節ともつながってくるだろうに。大和の記述は、矛盾と言わないまでも、不統一である。引用した１節は、本文全体の中で、そこだけ、ふいに変貌したような異様なすがたを見せるので、私は目をこらして注目しないわけにはいかない。

大和の『英文学の話』にはまるで謎のようなところがある、と言ったら、人は私を大げさだとわらうだろうか。それは一言でいえば、「序」「凡例」やさいごにあげたあの１節と本文とがどうつながるのか、という問題である。そのつながりは、どう説明したらいいのだろう。それには、前に私が言った彼の心の地のようなものの働きを考えてみる、という方法がある。

前に私は、この本には大和のイギリス王室に対する敬愛の念が隠されている、と書いた。そのとき私は、それは大和における地のようなものだ、と言った。彼の心の地となるものの働きが、彼にこの本を書かせた原動力としてあった、と私は考えているのである。その地となるものは、この本の中に隠されている。隠されているものが謎めいて見えるのは自然なことだ。その彼の心の地にまで私の議論が及んだときはじめて、私は、この『英文学の話』を、その全体をまるごと見ることのできる端緒をつかむだろう、と予感する。

(3)　素顔にせまる

これからあと私は、暗闇の中を手さぐりで進むことになる。なにしろ、隠されたものをさがし出そうというのだから。しかもそれはたくらみをもって隠されたものではないのだから。たくらみで隠されたものをさがすのはむずかしくはない。（探偵小説の犯人あて、だ。）しかしこの本に隠れているものは、当人が隠そうと思わずに隠れているものだから、いやひょっとしたら、その当人からさえも隠されているものだから、それを見つけるなんて、もともとたやすくはできない。

前に私は『英文学の話』の書かれ方を説明したところで、著者はまず各時代の時代背景を説明したあと文学の話にとりかかる、と書いた。「その時

代」という小見出しをつけて当時の歴史――といっても政治史――が書かれているのだが、その記述に特徴がある。こういうものはさっさとすませて早く本題の文学の話に入りたい、というおざなりな書き方ではないのである。第1に説明がくわしい。その上に筆が生き生きとはずんでいる。そこに登場する人物、描かれる事件とも、描写に力こぶが入っていて、読む方もそれにひきずられてつい身を乗り出し、思わず著者の言うことに耳を傾けてしまう。

いつもその調子で書かれているからどこをあげてもいい。たとえば第6章「ヴィクトリア朝の文学」の最初のところがまさにそうである。著者はまず1839年に郵便切手制度がつくられたことから話を始める。詩人コールリッジと貧しい少女の思いがけない出会いをのべ、そのふたりの「ちょっといい話」的なエピソードからやがて新制度が採用されたいきさつを描いて、話をこうしめくくる――「この小事件は併しヴィクトリア朝の時代の開幕の拍子木のように響くではないか」(257) と。それを読むとまるで読み手の耳にその拍子木の音がきこえ、さてこれから芝居のようなどんなに痛快な時代が始まるのか、興味しんしんの心持ちになるのである。こういう文章は、読み手をおもしろがらせようという下心からは出てこない。それは、書き手じしんの心がはずんでいて、本気でこの時代に肩入れしているからこそ出てくる表現なのである。

もうひとつの例。同じヴィクトリア朝の後期を扱った箇所である。著者は「その時代」を説明して、リンカンがアメリカ第16代大統領にえらばれたと語り始める。ヴィクトリア朝の話にどうしてアメリカ大統領が出てくるのか、一瞬キョトンとする読み手にかまわず、著者は、まもなく南北戦争が始まったと書き進め、そこで「英国では意見が分れた」(315) と言う。金持は南部を応援した、労働者とインテリはリンカン側についた、と明快に書かれると、もういっぺんに、当時イギリスをまっぷたつに裂いていた2つの陣営の対立図が目にうかんでくる。著者は、いかに労働者は「忍苦して」リンカン側を助けたか、「金権階級」はいかに内閣を動かして軍艦を南部側に売り渡しさえしたか、を描いていっそうその対立図を鮮明にする。

さいごにリンカン側の勝利がイギリス政府を苦境に追いこんだと書いて、さて行を改め、「この事件はヴィクトリア朝後期の英国の運命を暗示する」(316) としめくくる。読み手としては、その「暗示」をたっぷりと心に感じとることになるのである。そのあと、著者は当時のイギリスの政治事情をことこまかに、例によって生き生きと説明してくれるのだが、すでに十分に「暗示」を受けた読み手は、その説明をよろこんで受け入れ、ヴィクトリア朝後期の「英国の運命」を親身になって理解するということになる。

大和のこの筆力はどこから生まれたか。これらの文章は、一国の社会の動きを、とくにその政治の動きを、ひとつかみにグイととらえる力のつよさを私に印象づける。もともと彼の心は、一国の政治の動きという大きな対象を目の前にするとき、自然に心がはずみ、思わず手が動いて力いっぱいそれをつかみとろうとする傾きがあるのだろう。一口で言って、彼は政治好きなのである。彼は政治に心たかぶる人であり、その心のたかぶりが大もとの原動力となって、その根から先の方に出て咲いた花のように、あれらのはずむような生き生きとした政治の歴史の説明が生まれたのだろうと私は推測する。

——大和さん、あなたはほんとはうんと政治好きの方でしょう。

と仮りに私が言ったとする。「なにを言うんだネ、キミは」と彼はそう言われてイヤがるに違いない。そしてなおしつこく念を押す私に対して

——まあ、そこんところはどうだろうね。といってべつにボクはナニナニ主義者でもないがね。

と、たぶん歯切れわるく返答してくれることだろう。

私は、大和が政治上のなにかの主義をもっていた人だと言っているのではない。(私は『英文学の話』の本文から見て、彼が天皇心酔極右論者ではなかった、とすでに書いた。)まして彼が特定の主義主張をもって運動する政治活動家的素質の人だったなどと思ってはいないのである。そういう点では、彼はじつに妙な人であった、というのが私の判断である。

たとえばこういう文章がある。カーライルをとりあげたところで、大和は、彼の書きものは「いずれも民主政治を罵倒し、力即正義の帝国主義を

唱え、現在のムッソリーニ氏やヒットラ氏やレニン氏スタアリン氏等の独裁政治を予言している」(305) と書く。私としては、ナニコレ？　と思わずにはおれない。まず「ムッソリーニ氏やヒットラ氏やレニン氏スタアリン氏」と4人の名がズラズラとならんでいるのにびっくりするのである。敵も味方も区別なしにならんでいる。それも律義に氏なんかつけられて。当時イタリアドイツは日本と三国軍事同盟（昭和15年）をむすんだ心づよい味方であった。そしてそのころ日本政府がもっとも熱心に敵対していたのは共産主義に対してであり、レーニンスターリンの名は、口にするのさえはばかられた敵の大将の名である。大和がこの文章でその4人の名をこともなげにならべ立てているのを当時の読者が見たとき、たいていのでたらめにもおどろかない頭の持主でも、これにはクラクラするような混乱を感じただろう、と私は想像する。それからもうひとつ、この4人――味方2人敵2人――をまとめてバッサリ「独裁政治」家よばわりをしているのは、大和がきもが太いのか大ざっぱなのか私には見当がつかない。(あとの2人はともかく、前の2人をあからさまに独裁者だと呼んだ文章を――現在ではあたり前の常識だが――当時少年の私は読んだ記憶がない。当時の言論にくわしい史家から教えられたいところだ。)その上で、引用した文章の前後関係から考えると、手さぐりしている私の指先が、思いがけないものにつきあたるのである。

引用文はカーライル論の箇所にある、と私は前に言った。そのカーライルが大和は好きではない。「彼の著作は何か私に反撥させる、いやなものを含んでいる」(305) と彼は率直に書いている。よけいなことだが、こういう彼の率直さがいい。このズケズケとした言い方にある元気のよさが、この本の第1の魅力だ。それはまたあとでふれるとして、とにかく引用の文章は、否定の文脈の中にあり、だから引用のなかのマイナスはじつはプラスなわけだ。ということはカーライルが民主政治を罵倒しているのは、まちがった人間がまちがったことを言っているので、すなわち大和は民主政治の側にいる、ということになるのである。なんと、大和は民主主義者だと私は言っているのだろうか。われながらまるでアッケにとられるような

話だが、私が手さぐりして得たこの感触は、じつはこの本の他のところにもある。

第5章「浪曼復興の英文学」の始めに、著者はいつものように「その時代」と題して政治の歴史を書いている。扱っているのは1832年の新しい選挙法成立まで。その記述――これがまた例によって、いかにも政治の話に血わき肉おどるような興味関心をもつ人の文章だなあと感じさせるのだが――の一番終りのところに、この新法律で「新興都市の中流階級を議会に送ることによって、かなりデモクラシイに近づいたといってよい」(194)とある。その前までの文章で、著者は、その法律をめぐって攻める側守る側の力ずくのせめぎ合いとそこで起こった「全国の非常な興奮」(194)を、著者じしんがまるでジッとしておれないような口調で物語っているので読み手もついひきこまれ、さいごのその法律成立に、ああよかった、と著者とともにホッとするのである。そして知らず知らずのうちに、デモクラシイとはよいものである、よき政治の理想である、という意識が――むろん暗黙のうちに、しかもはっきりとではなくうっすらと――読み手の心に伝わってくるのである。

もうひとつ。この本はアメリカ文学の記述も含む、と前に書いた。で、19世紀アメリカ文学の説明の中にホイットマンが登場する。引用は彼の『草の葉』の話のところ。著者が言うには、これは「リンカンの高邁な民主主義を歌」ったもので、この詩人は「最も米国的な天才」(334)である、と。そのホイットマンに大和が好意をもっていたことは、彼がすぐつづけて、「彼は我国でも漱石や樗牛や有島武郎たちの共鳴を得た」と書いているのからも推察できる。他の2人もたぶんそうだったろうが、大和は漱石を愛読していて、この本で何度も彼に言及し、ときには明治37年の「わが漱石の若い頃の翻訳」(195)まで引用しているくらいだ。漱石の好きなホイットマンが大和も好きだった。そしてその詩人の歌った民主主義に、「高邁な」という形容詞をつけているところに、私は感触として彼の民主主義びいきを感じ、その詩人を「最も米国的な」とよんでいるところに、さらに一歩すすんで、彼の民主主義国アメリカへの愛着――とはっきりよべるものか

どうかはあやしいが、少くともその気配――を感じとる。

とは言うものの、こういう推測は危険なので、このあたりでやめよう。私の推測に過ぎないから危険だ、というのではない。そうではなくて、もともとうすぼんやりとしたものをことさら鮮明にしてしまうおそれがあるから、である。うすぼんやりとしたものは、そのレベルのままにとどめておいた方がいい。もとはといえば、私は彼の政治好きという形に現われたその心の独特の傾きを説明したかっただけである。その心は、ただちに彼をして、政治上のナニナニ主義者としての姿勢をとらせる、というものではなかった。そういう種類の政治好きでは彼はなかった。むしろ彼のそと向きの性質は、彼がじっさいの暮らしの中で教師をしていたというところから、教育熱心な教師の働きの中に十分に発揮されただろう、と私は想像するのである。

だから政治好きという言い方が、では彼はナニ主義者かという質問をひきよせてしまうのを避けるとすれば、彼はむしろ、現実の当面の相手としての学生に向かって、積極的に働きかける教育熱心な人であった、と言った方がいいのである。たとえば私は前に、『英文学の話』の記述の特徴を6つあげたとき、その第1として、作家作品がたくさんあげてあり、その他の文人や学者も多く、彼らでこの本は超満員だ、とのべた。その特徴は、ひとつには、しらべたことを全部学生に教えなければ気のすまぬ彼の教育熱心から出たものである。そしてベン・ジョンソンが出てくると、「尚、第18世紀のジョンスン博士とは名の綴字が違うから注意を要する」(114) と書くのは、(むろんこれが専門家相手の本というより、「一般の人々」(「序」、1) のために書かれたことにも起因するのだが) 彼がめんどう見のいい教師であったことを私に想像させる。この本全体を通読して私の得た印象を言えば、こまかなところまで学生に親切な講義をし、あまり授業に熱中してあれもこれも教えたくて終業のベルが鳴ってもまだ授業をつづけている教師のすがたである。

そういう積極的な、内にとじこもらないで元気よく外へふみ出していこうとする心をもった人の文章が、ときに力こぶが入り過ぎてしまうことに

なるのも、自然なことである。たとえばギボンのローマ史を評して言ったつぎの文章がその1例である。この史書は、と彼はこういう言い方をする——「肩で風を切って濶歩するような、威風あたりを払う文体で築き上げた宏壮華麗にして堅牢無比な大金字塔である」(175)と。この文章は、私に、大和の心の地のようなもの、彼の素顔ともいえるもの、あの外向的な元気のよさが、その勢いのあまりに、表現としては反って真実味をそぐマイナスの働きをした例だ、と思える。

そういう傾きをもった心に近づくには細心の注意が必要である。私が警戒しなければならないのは、その心を、あらあらしい粗暴なもののようにとってしまうことである。大和から言うならば、彼は粗暴だと言われることほどがまんならないものはなかっただろう。彼としては、粗暴な心で文学などやれるものか、と言いたいところだろう。まさにその通りだが、私の議論はほんの少し角度が違う。私が言いたいのは、大和のような、積極的な元気のよい心がもつ、傷つきやすさという1面のことである。それを理解しないで、そういう心は傷つかない、と言うのは無知から生まれた空想の言葉である。

前に一言ふれたが、大和のカーライル批評をとりあげたい。彼のカーライル批判は、公正な批評というよりも、過敏に反応してカッとなった心の表現だと言った方がいい。それほど彼の言葉は遠慮会釈なしのものである。カーライルの「スコット論」は「ひどく不公平で偏見にみちて狭量で非論理的で下劣」(303)である。『衣裳哲学』は「ドイツ哲学の仕立直し(この冗談!)に過ぎ」ず、内容は「凡庸の一語につきる」(304)のであり、その文体は「憎悪から」生まれたものだ、と大和は言う。結論として、彼の思想は「凡庸」で「時に偏頗で矛盾だらけ」だが、「文人に不可欠な」「情熱」と「至誠」と「独自の文体」とをもっていたので、それが彼の作品を「非凡ならしめ不朽ならしめている」(306)と言うのである。「不朽」とは認めるが、(前にも引用したが)「彼の著作は何か私に反撥させる、いやなものを含んでいる」と彼は言う。大和の心は、生き生きと元気よく働くのだが、ときに「何か」「いやなもの」に出会ったばあい、元気にまかせてそ

れを軽くあしらう、というようなことは彼はしない。それがどんなことだろうと、いちいちそれに反応し、過敏なまでに心をたかぶらせて「反撥」するのである。ほんの些細な例だが、たとえば彼は、もうまるで八つあたりするように、「威張りくさる小役人根性」(289)——これは『オリヴァ・トウィスト』論に出てくる——などと言う。「威張りくさる小役人」にどれほど彼が「反撥」を感じていたかがわかるのである。

こういう心を、私は傷つきやすい心とよんだが、むしろ私は繊細な心とよびたいくらいである。

『英文学の話』を読むと、私は著者の内側の心の動きを読みとることができる。表面の言葉のすぐ裏側に彼の内心の動きがあるのが察しられるのである。その動きを、どんなに小さな一瞬のそよぎのようなものも逃がさないように観察するとき、はじめて私は、大和の心の素顔をまのあたりに見ることができる。(つづく)